

「ハレとケ」 通信

「非日常」と「日常」の、日本の風情のかたちを楽しみ暮らしをご提案する季刊誌です

建設に携わることの幸せを、おすそわけ。

物語のある建築 (2)

琴平グランドホテル 【前編】

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

【花見を楽しむ】 【お花見弁当】

花ある数寄屋 (2) 「鬼瓦」

中津万象園 「花の歳時記」 (2) ツツジ

かさねの色 (2) 「薄桜萌黄」

名勝・中津万象園を、

「現代の数寄者たち」の集う場に！



表紙写真：昨年四月。一の森を鯉のぼりが舞っていました。

「琴平グランドホテル (前編)」

平成十八年、秋。

琴平グランドホテル 紅梅亭の「花でらす」における食事会のあいさつの中で、近兼孝休会長(当時社長)が、当社との「なれそめ」について語ってくれました。

それは、過去に係わったお客さまが、当社について語ってくださることの素晴らしき、貴重さを、実感した一瞬でした。

そのときの感動が、この「ハレとケ」通信をつくるきっかけにもなっています。琴平グランドホテルにまつわる、素敵な物語。

それは、大きな夢をみ、まっしぐらに突き進んできた男と、「この男に賭けてみるワ」と、その夢を信じた男との、魅力的な物語です。



昭和48年当時の琴平グランドホテル

(株)琴平グランドホテル

代表取締役会長 近兼孝休氏

私共の旅館のそもその始まりは、昭和二十七年、「丸忠」という料理屋に作った、十室ほどの客室。そこで料理仕出し業を営みながら、どうしても旅館をやりたいと夢みておりました。

当時、大麻山のでっぺんにまでロープウェイが着くという計画がありました。発着駅が、今のホテル(現・桜の抄)の玄関の位置に当たります。候補地として考えていたのは、伏見製菓が所有していたそのあたりの土地の真ん中です。

そこには雲錦亭という数寄屋風の茶室があり、庭には見事な紅梅とすだれ桜がありました。こんびらさんへの参拝客が写真を撮ったりと楽しんでいた場所です。私たち丸忠は雲錦亭へ仕出し弁当を届けに行っており、様子もよく分かっていたことから、「ここで旅館をやりたい」と、願っていたのです。

旅館を建設するにあたり、まず計画を…と、高松の富岡建築研究所さんに設計を依頼。ところが、銀行より、建設費の融資を断られてしまいました。困って琴平農協に相談をし、新しい融資引受先と

して、信連さんを紹介されました。富士建設と出会ったのは、その縁です。というのは、琴平農協の建物を建設したのが、富士建設さんだったのですから。

新しい融資先の紹介は受けたものの、まだ融資の目処がついたわけではありません。信連さんの条件に、「三〇%の自己資金を用意すること」というものがあったからです。この自己資金をどうやって用意するか?…計画では、丸忠の旅館を売却して、代金を自己資金に充てるつもりでした。ですが、この丸忠の旅館の建っていた敷地は、8割が借地。そんな状態では、とても売却することはできません。まずは、この借地を譲っていたらどうか交渉から始めなければいけませんでした。その借地の地主さんは、東京女子栄養大学の理事長。私は東京まで会いに行きまして、自分の夢や想いを懸命に語り、お願いを致しました。この方は本当に立派な方でした。すぐに息子さんに話してください、「こんな若いひとが、夢を持つてここへ来ている。素晴らしいことじゃないか。」と、その場で私にこの土地を譲る決断をしてくれました。しかも、安い金額で、です。

…そんなわけで、三〇〇坪のこの丸忠の敷地が、自分のものになったのです。

その後、大麻山へのロープウエーの計画が中止となり、予定していた土地も購入できませんでした。

この地主さんとの交渉が終わった時、嬉しくて嬉しくて…。帰り道、安心したことと、あまりの嬉しさとで、同行していた母を連れて熱海温泉へ寄り道しました。あちこちの温泉や旅館を見てまわるうちに、夢はどんどん膨らみます。そこからの帰り、大阪あたりだったと思いますが、初めて、琴平農協から紹介された、富士建設という会社へ電話を致しました。「私は琴平で丸忠という料理仕出し業をしております近兼と申しますが、この度旅館の建設を予定しております。規模は千坪程度、予算は三億円程度と考えておりますが、その建設の相談に乗って頂けませんでしょうか。」と。その後、目を改めてお会いすることになりました。

そして、真鍋さんとの出会いの日。お目にかかってまずお願いしたいのは、「三〇〇坪の土地（丸忠のある場所）があるから、その土地を、富士建設で買っていただけではないでしょうか。」ということ。先ほど言いましたように、この土地の売却代金を、建設費の自己資金に充てるつもりでしたから、全体の必要な資

金は三億円。自己資金はその三〇パーセント、つまり一億円必要です。そこで、「一億円でこの土地を買っていただけませんか。」と交渉をしたら、「ええっ、三億円の建物建てるのに、一億円で土地を買うと言ったら、三〇%やないか。しかも、この土地に一億円の価値があると思うところんか。」と真鍋さん。確かにそれはそうなのですが、一億円を用意できなかったら、この融資の話はまともならず、旅館建設自体ができません。私も必死です。

その後、何度も託間の富士建設の本社へ通い詰めました。結局、私の熱意に根付けたのでしょうか。その土地を富士建設が一億円で買い取る契約が成立しました。

さて、その一億円を自己資金として旅館の建設を始めたわけですが、昭和四十七年から四十八年にかけて行われたこの工事は、ちょうどオイルショックの真っ只中。材料が入らない。八月完成予定の工期が、十月完成に伸びてしまいました。私は当然、八月完成の予定で旅行社などへ営業にまわり、宿泊の予約をいただいております。が、工期の延長でそれも全てキャンセル。「こんなことでは困る！」と真鍋さんに抗議しましたが、社

会情勢を考えると強くも言えず、完成の日を待ちました。

そして、昭和四十八年十月、琴平グラウンドホテルのオープン当日を迎えました。八月のご予約をキャンセルしてしまったにもかかわらず、おかげさまで予約で満員。幸先の良いスタートです。

…それなのに、なんと、また工事が終わっていない。玄関周りの工事ができておらず、入口はバラスのまま。タイルも完全には貼られていない。私や設計事務所さんをはじめ、とにかく総出で一生懸命貼りました。もちろん、「こんなことでは！」と、お客さまは怒りましたよ。そこをなんとかお詫びして、じゃあ…となると、今度は風呂が間に合わない。取りあえず先に御食事を…と段取りし、風呂を準備しますが、先程まで工事をしていたわけですから、風呂の湯はドロドロです。必死で濾過して、何とか間に合わせました。タイルが滑りやすい素材だったこともあって客が転倒、怪我をするなどというトラブルも発生。でも、真鍋さんとははじまりがはじまりであっただけに、妙な絆で結ばれている気がしていました。だからでしょうか、色んなことがあっても、その絆が断たれることはありません

でした。それに、「上手」は言わないけれど、味のある、愛敬のある方でした。…。そうやっているうちに気心も知れ、今に至る長い付き合いの始まりとなったわけです。

そうしてオープンした「琴平グランドホテル」ですが、当初から毎日、満室でしたよ。というのも、そんな旅館は、当時琴平にはありませんでしたから。同じ建物の中にスナックやバーがあり、冷暖房も完備していて快適。絶対に多くの方に関心を持っていただけたらと思うておりました。そして時代も良かったこともあるでしょうか、ほぼ経営は順調。そうなると、また次の夢が膨らんでいきます。増築です。そして少々無理をして、隣地を買収したのが、昭和五十五年のことです。

増築となると、二百畳の大広間が二つはいる。客室も、約倍になります。この工事はこれまでこのあたりでは例が無かったほどの規模ということもあり、大変難しいものとなりました。なにしろ規模も規模ですが、計画地は斜面です。しかも進入路や余地はありません。どうやって鉄骨を建てればいいのかということさえ分からない状況でした。冗談ではなく、

「ヘリコプターで吊るしかない…」という意見も出たほどです。

当時、大手ゼネコンのS建設の四国支店の常務さんが、琴平の出身で、「何か自分の手で建築物を残したい。」と、熱心に営業に来られていました。見積をしていただいたら、なんと、富士建設さんよりも安かった。真鍋さんにその旨を言って、金額の交渉をしますが、なかなか折り合いが付かない…。

その頃社長室はありませんでしたから、二人でホテルの客室で夜中過ぎまでああでもない、こうでもないやり合いました。でも、決着が付きません。お互いぐったりと後ろへ寄りかかりながら、話し合いを続け、午前一時を過ぎた頃でしょうか、真鍋さんが、「腹が減ったなあ。」とひと言。私はその日、交渉がまとまったら一緒に食事をしようと、下拵えはしていました。しかし、そんな真夜中ですから、料理人は帰ってしまつて、もういません。しょうがないので私が料理の仕上げをしました。それを部屋へ持つていき、二人で黙々と食べ、それでリラックスしたのでしょいか。真鍋さんから、「そろそろ握手をせんか?」と切り出されました。私も疲れ切っていましたから、「じゃあ、そろりしませんか。」と。そんな

ことで、ようやく金額がまとまりました。このあとも、値決めについてはいつも大変で、お互い綱引きばかりでしたが…。

このころは本当に大きな決断を迫られることの続いた頃で、ストレスもすごかったですね。けれど、こうして思い返してみると、ひとに支えられたとの思いが溢れてきます。それに、ひとつひとつに夢があった。

そういえば、つい先日、こんな話を聞きました。ここが完成した時、真鍋さんは、近くにいた富士建設の社員のYさんに、「この建物をやっつていぶん損をしたけど、まあ、この男に賭けてみるわ。」と言ってくださったそうなのです。この男つて、つまり、私のことですが、真鍋さんが亡くなって十六年以上たった今になって初めて聞いた話ですが、Yさんは、そのとき、「そういう風に言わせるこの近兼という社長は、いったいどんな男なんやろう?」と思ったそうです。

こうして本館と併せて客室九十室・大宴会場・会議室等も完備した旅館となり、従業員の寮の整備も行った。ひととひとの夢は叶え、体勢も整ったと見えたかもしれません。ですが、そうこうして

いるうちに、瀬戸大橋の開通が近づいてきた。私は「絶対にもつとお客が来る!」と確信していました。絶対に成功すると、信じていた。

そこで次の計画にとりかかったのです。

次号【後編】へ続く。

今回の取材中、情けない当社のエピソードに情える私に、近兼会長は「富士建設さんと出会わなかったら今のホテル今の自分はない。お客さまの夢、理想、想いを現実のものにするお手伝いをするのが『建設業』という仕事なんだ!」ということ。皆さまの夢を共に信じ、その夢が叶っていく過程を傍で喜び、「一緒に見つけていきたい。これからも皆さまのために、もっと素敵な建物をつくり続けていきたい」と、心から思いました。

今回の【後編】では、瀬戸大橋時代のエピソード、旅館人生の中で出会った様々な魅力的なひとたちについての「物語」も聞かせていただきます。お楽しみに!(真鍋)

●略歴紹介



近兼 孝休 (ちかかね たかやす) 氏

- 1938年 香川県生まれ。
- 1961年 有限会社料理旅館丸忠を設立 代表取締役
- 1973年 有限会社琴平グランドホテル 代表取締役
- 1975年 株式会社琴平グランドホテル 代表取締役
- 1988年 琴平町観光協会 会長
四国こんびら歌舞伎推進協議会 副会長
- 2003年 日本観光旅館連盟四国支部 支部長
- 2008年 株式会社琴平グランドホテル 代表取締役会長

近兼氏は、国土交通省の観光に関する重要な政策のひとつである「観光カリスマ塾」に於いて「観光カリスマ百選」にも選ばれている。

この「観光カリスマ」は、“従来型の個性のない観光地が低迷する中、各観光地の魅力を高めるためには、観光振興を成功に導いた人々のたくいまれな努力に学ぶことが極めて効果が高い”という趣旨のもと選定されているもので、近兼氏は

「伝統ある門前町に新たな息吹を吹き込み、躍動感ある“まちづくり”のカリスマ」

との称号を受けている。

「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を暮らす。(2) 【花見を楽しむ】

【花のある暮らし／花見／小袖幕】

少しずつ暖かくなってくるこの季節、お花見に行きたくなります。寒い冬を越えてようやく見せる淡いピンク色の花びらは、人の心を和ませ、陽気にしてくれます。そんなお花見、皆さんはどのように楽しませますか？ お花見はそもそも奈良時代の貴族の行事が始まりだと言われていますが、その時代に見られていたのは梅の花。花見に桜の花が見られるようになったのは平安時代に入ってからのことです。

そして、花見が庶民に広まったのは江戸時代、八代将軍徳川吉宗の時分。この頃江戸では放火が絶えず、困っていたところ、考えついたのがお花見だったそうです。吉宗は、江戸の各地に桜を植えさせ、花見を奨励したのだそうですが、その背景には、環境をきれいに整え、花見によって市民の憂さを晴らすこと、人の心も安定させようというねらいがあったようです。

このような形で庶民に広まった花見も、現在とは様子が違っていました。その一つが『小袖幕』と呼ばれるものです。

現在でもお花見を行う場所に、赤い幕を張り廻らせますが、江戸時代には新調した羽織小袖を木陰に掛け並べていたようです。なんでも裕福な町人たちが衣装自慢のために幕の代わりに掛けていたとか。淡いピンク色の中に、色鮮やかな小袖が掛っていたことを考えると、会話もお酒もより進んだでしょうね。

現在では、お花見での小袖幕の様子が着物の文様として残っているようです。その文様は、主にはお花見の席を描いているので、桜の花を用いることが多いようですが、もみじも配して春秋にしているものもあるようです。着物も「着て楽しむ」だけでなく、「見て楽しむ」というのも風流ですね。

今日のお花見で『小袖を木に掛けて』ということとは難しいと思いますが、春を機に、しまい込んでいた着物を出してみてはいかがでしょうか？



「ハレとケ」のある 遊びかた・暮らしかた

この季節を遊ぶ。(2) 【お花見弁当】

お花見に付き物なのは、おいしいお花見弁当。お重箱に入った和風のおかずを思い浮かべますが、最近では和食にとらわれないおかずでも楽しませているようです。お箸を使わなくていいものを入れることで子どもにも食べやすいように工夫されていたりもします。

さて、先程もご紹介いたしましたように、お花見が庶民に広まったのは江戸時代。その頃にも、お花見にはやはりお弁当を持って行っていたようです。それはそのお弁当の中身とは・・・。

お重は上中下の部の三種類もあったようです。上中下のすべてのお重を一度に食べていたかどうかは分かりませんが、それにしてもボリュームのあるお弁当ですね。「花より団子」という言葉の由来を感じさせるものです。

今年のお花見、江戸時代に食べられていたお花見弁当の品を、一品加えてみてはいかがでしょうか？

(文・イラスト 土岐倫子)



【上の部】

- (一) かすてら玉子、わたかまぼこ、若鮎色付むつの子、早竹の子旨煮、早わらび、打銀杏、長ひじき、春がすみ (寄物)
 - (二) 蒸かれない、桜鯛、干大根、甘露梅
 - (三) ひらめとさよりの刺身に、しらがうどとわかめを添え、赤酢みそを敷く
 - (四) 小倉野きんとん、紅梅餅、椿餅、薄皮餅、かるかん
- (割籠) 焼飯 (焼むすび)、よめな、つくし、かや小口の浸物

【中の部】

- (一) 蒲鉾、車海老鬼殻焼、鱧照煮、長芋、わらび、つまみ麩、むきくるみ
- (二) むつ刺身 (酢みそ・小唐辛子)、三月大根短冊、貝割菜、はりはり大根、うど、嫁菜
- (三) 唐の芋の子 (里芋)、烏賊と蕨煮つけ (上に木の芽おく)
- (四) おぼろ饅頭、山椒餅、

【下の部】

- (一) さより蒲焼、蛸桜煮、唐の芋、人参、わらび、王づさ牛蒡、木くらげうま煮
- (二) むしがれい色付焼、田にし木の芽和
- (三) うぐいす餅、きぬた巻き
- (四) 焼飯 (焼むすび)



名勝・中津万象園を、「現代の数寄者たちの集う場」に！

「近代数寄者」と呼ばれた人々を、ご存知でしょうか？ 馬越化生（恭平）、上野是庵（理一）、益田鈍翁（孝）、岩崎弥之助、根津青山（嘉一郎）などが代表的なひととして知られていますが、彼らは、いわゆる現役の「企業人」でありながら、戦後、日本の美術品（絵画、陶器など）が海外へ流出しようとしたとき、それを止めるために自ら買い取り、「日本の美・文化は、日本自身で守る」という姿勢を強く打ち出し実行していきました。（三十六歌仙断裁事件等もあります）

のちに、収集したものの美に取り憑かれ、その美を最も引き立てられる場として、



て、自分でも茶の湯に親しむようになりましたが、茶の湯の精神性や作法にはさほど拘らず、あくまでも美術鑑賞の場ひとつの「遊び」の場としての茶を楽しましました。（その「遊び」に止まろうとする姿勢から、「茶人」ではなく「数寄者」という言葉があげられたとのこと。）

そして、「趣味＝余裕 教養である。」「趣味とは近代日本人のそなうべき教養だ。」として、仕事に、遊びに精進しました。今の私たちからみても、十分に魅力的なその要因は、「企業人」であり、かつ、「趣味人」であることの両方を兼ね備えていたことにあるように思います。

中津万象園も、「大名」であると同時に、ひとりの「数寄者」であった人物のつくった場です。



また、茶の湯が時には政治的駆け引きの場としても使われる、本来男性のための場だったのと同じく、大名庭園も、それ自体が癒しと同時に、男性のための「社交・宴席の場」であることを目的とした役割を持っていました。

そう考えたとき、「現代の数寄者」とも言うべき存在、また企業人たちにもっと万象園を楽しんでもらうことはできないだろうか？と思うようになりました。そこから生まれたのが、**名勝・中津万象園を、「現代の数寄者たち」の集う場**に！という夢です。

では、現代の数寄者とは、どういったひとを指すのかというと、「仕事に対する責任と誇りを持ち、また同時に、『俺のしてきたことは、単なる金儲けじゃない。』という自負、そして、その自信ゆえ



の色気、オーラを持っている人。」「日本の伝統文化をアレンジして遊ぶ粋さを持った人。」ではないか、と思っています。そういった素敵な「現代の数寄者」の皆さまが、遊び、楽しみ、そしてまた「社交の場」として中津万象園を利用してくださる…。その夢の実現に向けて、さまざまな遊びをご提案していきたいと考えています。

第一回目は、二月七日に行われた、「初釜」。そして、第二回目は三月二十八日の「聞香」会、第三回目は五月頃に風炉の茶事を予定しております。

ひとりの経済人として、そしてまたひとりの人間として、憧れを抱かせる存在であること。「遊び」は、人生の魅せどころ、美学のみせどころ。ぜひご参加下さいませ。

◆次回は、「聞香」会です。

平成二十一年三月二十八日（土）
午前十時三十分より午後二時半頃
参加費 壹万円

中津万象園・丸亀美術館にて
〇八七五―八三一―二五八八（直鍋）

花ある数寄屋（2）

わたしたちが提案したいのは、依頼主の美学を反映した空間。品格・調和・色気・遊び・技をキーワードに、数寄屋の魅力をご紹介します。



万象園絵画館のために
数珠掛京型をアレンジしたもの



今、和風住宅でよく見かける形。
香川県でこの形の鬼瓦を使い始めたのは富士建設が走りだったそう。

「鬼瓦」



↑万象園にたたずむ四阿に使用した鬼瓦。木の皮で葺いた屋根にはこんな鬼瓦もよく似合います。
(写真はすべて中津万象園。(撮影：宮本英機))

「鬼瓦」と聞くと、寺社などに使われている、非常に大きな、造形的なものを思い浮かべるひとも多いでしょう。「しび」と言われた当初のかたちから、厄よけの意味を込めたいわゆる「鬼」や経文、縁起の良いさまざまなモチーフまで、鬼瓦の数々は見ても楽しいものです。

そのように寺社建築ではとりわけ顕著な「鬼瓦」の個性ですが、住宅においても、同じく特徴の出やすい部分です。

なかでも、「住宅のデザインは住むひとの美学、個性、人生観を反映すべきだ」と考える当社の数寄屋風住宅にとって、相応しい勾配と深さの屋根を考へること、そして、この屋根のラインに似つかわしい鬼瓦を選ぶことは、非常に重要なポイントとなります。

たとえば、与える威圧感を大きくするには熨斗瓦を多く重ね高さを出し、鬼瓦も大きくする、逆に、謙譲な調和を生むなら、高さを抑え、勾配は緩く熨斗瓦は少なく、鬼瓦も高さの無いものにする、…というふうに変化するのです。

ただし、鬼瓦が家に対して大きすぎればまるで丁髷だ、だが、小さすぎても貧相だ…、とその製作には試行錯誤を重ねたようでおかげで、結果生まれた鬼瓦は、屋根の「むくり」のかたちと相まって、車で走っていても、「あ、あの家はうちの設計施工だね」と一目で分かる特長を備えています。

写真上段の数珠掛京型の瓦は、大名庭園を引き立て馴染むものも…と、中津万象園絵画館の屋根のためにアレンジしたもの。今見ても美しい、と感じます。そこで、先日、この形をモチーフに、和三盆糖菓子のための木型をお願いしてみました。さて、「鬼瓦」型の和三盆糖の姿や如何に…？

それは、次号のお楽しみです。

「花の歳時記 (2) ツツジ」

万物が躍動を始める新緑の頃は、中津万象園が一年で最もあでやかな季節です。そしてその主役を演じるのがツツジであります。万象園のツツジは、芝生広場や園内回遊路周辺など至る所に群植されています。その中で景観的に最も優れている眺めの拠点は、絵画館のバルコニー（観月台）です。すぐ左側には「せきさい溪」と呼ばれる豪快な滝の石組みが満開のツツジに覆われ、右側に目をやれば、池泉に零れ落ちんばかりに咲き乱れるツツジの彼方に、邀月橋を望むことが出来ます。ツツジは万葉集にも詠まれています。



＜中津万象園・丸亀美術館へのアクセス＞
 瀬戸中央道路
 坂出北ICより約8.5km／約15分
 坂出ICより約14km／約20分
 高速道路善通寺ICより約5km 約10分

今日各地で植栽されている園芸種が現れたのは江戸時代になってからであります。万象園に植えられているツツジの品種名は、ヒラドツツジの系統である「オオムラサキ」であります。「オオムラサキ」は現在全国の公園や緑地、広場などに最も多く植えられています。なおツツジの名前の由来は、花形の「筒咲き」が訛ってツツジになったと言われています。（長岡 公）

【長岡 公 氏】

昭和2年10月 香川県丸亀市津森町に生まれる。
 昭和26年3月 鹿児島大学鹿児島農林専門学校農学科卒業
 昭和26年4月以降 香川県高率高等学校教員として主基高等学校・飯山高等学校・笠田高等学校・農業経営高等学校教諭、高松南高等学校・飯山高等学校教頭
 昭和63年3月 定年退職 香川西高等学校教頭
 現在 (財)中津万象園保勝会 理事
 ※主な著書に「讃岐の名園紀行」(栗林 玉藻編/中西讃編)がある。

今回の「物語のある建築」は、琴平グランドホテルさまの物語 取材の際、会長の語る「旅館人生」の迫力に、思わず興奮しました。不撓不屈の努力の積み重ねでありながら、大胆さ、スマートさも兼ね備えている。当社としては少々情けないエピソードもありますが、これ程「力」に満ちたお話を聞くのは初めて、お手伝い出来たことが嬉しく建築屋冥利に尽きるひと時でした。

当社玄関には、「百尺竿頭 百折不撓」と書かれた額が掛かっています。この言葉は意識すれば、「既製の枠にとらわれることなく、自分の思いを信じ、工夫をし尽くし、力を出し尽くして、決してあきらめない。」という意味になるのだと思っています。その言葉通り、自分の生涯をかけられる夢を見、その夢に愛着し、あらゆる手段を尽くすということの持つ『輝き』を、改めて目の当たりにし実感した「物語のある建築」となりました。

【編集後記】

古来より季節を感じさせた「色」を知る。
 かさねの色 (2)
「薄桜萌黄」
 日本人の季節を感じる心、美しいと感じる色彩感覚。そういったものの結晶とも言える「重色目(かさねいろめ)」は、平安時代に生まれ、季節の移り変わりを表現する配色として併せ仕立ての着物などに用いられました。現代でもしつらえなどにかし、平安の風雅を味わってみては・・・。

「薄桜萌黄」の重色目。
 表：薄青(薄い緑) / 裏：二藍
 着用時期は春。
 山桜の色目「桜萌黄」を地味にしたもの



*****御意見、御感想をお聞かせ下さい*****



建設業許可：香川県知事許可(特18)第189号
 一級建築士事務所：香川県知事登録 第416号
 宅地建物取引業免許：香川県知事登録(10)第1997号

富士建設株式会社

本社：〒769-1101
 三豊市詫間町詫間 300 番地 1
 TEL0875-83-2588(0120-832589)
 FAX0875-83-5864
 http://www.fujikensetsu.jp
 mail y-manabe@fujikensetsu.jp (真鍋有紀子)

【発行者紹介】富士建設株式会社は、現存する五重塔55基のうち2基を建立し、「建築は文化なり」を理念に掲げて、官公庁建物・各種施設等大型建築物をはじめ、数寄屋風住宅、デザイン住宅、リフォームまで幅広く施工している。また、県下において1300区画超の宅地開発・分譲の実績を持ち、「街づくり」に対する貢献には定評がある。なお、丸亀市指定名勝である「中津万象園」の修復維持保全活動も行っている。

- 営業所：高松営業所・丸亀本店・観音寺営業所
- 中津万象園・丸亀美術館／丸亀プラザホテル／味処 懐風亭